

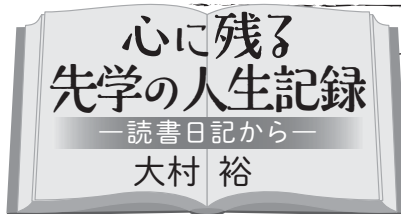
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.177
2018.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第4回

江馬修^{なかし}『一作家の歩み』(理論社 1957年)と

天児直美^{あまこ}『炎の燃えつきる時-江馬修の生涯-』(春秋社 1985年)
(その1)

江馬修は、考古学研究者としては「赤木清」というペンネームを持ち、いわゆる「ひだびと論争」(1937~38年)の火付け役を演じた作家として考古学者の間では著名である。天児直美は、その江馬の最晩年の「恋人」であり、江馬の最期を看取った女性でもある。ちなみに江馬と天児の年齢差は53歳であった。

江馬(1957)は、江馬の出生から66歳(1955年)までの回顧が自らによって語られている。天児(1985)の第一部は天児が江馬と知り合った時(1963年 天児21歳、江馬74歳)から没年の1975年(享年85)まで、天児の視点から叙述されている。両者を併読すれば江馬の全生涯をたどることができるわけである。なお、後者の「第二部」では、前者の要約に加え、若き日の江馬の行動に対する天児の鋭い所見が語られていて興味深い。江馬の生涯をコンパクトに概観できると同時にその人物論(的確かつかなり手厳しい)は、江馬という人物を知る上でおおいに参考になると思われる。なお巻末には年譜が付されており、便利である。

江馬は1889年に飛騨高山で生まれる。父弥平は地方産業の開発者で鉱山を経営し、県会議員になったこともあった。生家は裕福で羽振りもよかつたらしいが、丑年生まれの次男坊であった(自伝には兄が二人登場するので三男のはずだが)ため、迷信深い母の判断で彼女の生家に養子に出されてしまう。この地には、「丑年生まれの次男は長男を追いのけて相続権を奪ってしまう」という迷信があったためである。養家は貧しく、養母からはことあるごとに「捨て児」と罵られ、冷たくあしらわれていたらしい。そして13歳のとき、自分が裕福な江馬の実子であり、「捨て児」とされた理由を知ることになる。それからは「おれは江馬に帰るんだ、本当の親たちの側に戻るんだ、一日も早く帰してくれ」と養父母に迫ったのであった。その後、紆余曲折を経て生家に戻され、旧制中学にも進学がかなうのであるが、実母には冷たくされ、姉にも意地悪い陰険な態度を示されている。生家も彼にとっては決して居心地のよいところではなかつたらしい。そして家庭の束縛から離れた中学校生活も「心から厭でならなかつた」と回想している。そんな状況だったので、中学5年生のときに、とうとう家を飛び出し、東京にある横山大観画伯の自宅に飛び込む。かつて大観が高山に長逗留していた折面識ができ、大観の帰京の折に「自分は文学で身を立てる予定なので、中学を出たら先生の書生にしてほしい」という無茶な願い(文学志望者が画家の書生になるという発想自体妙な話である)を受け入れてくれていたので、それを頼みにした出奔であった。しかし大観の家は手狭で、しかも彼の母親と二人の成人した妹が同居していた。突然の来訪に大観は面食らったと思われるが、何事もなかつたように、別に厭な顔もせず江馬を受け入れてくれたのであった。さすが大人物である。5日ほどそこに滞在していたが、このような状況ではとても居たたまれず、江馬はこの度

の非礼な行動を詫び、ひとまず家に帰ると大観に申し出る。大観は一言「そうですか」と言ったがそれ以上何も言わなかつたという。私は大観の絵は好みではないが、その人物像には強く引き付けられる次第である。

帰郷後、ほどなくして父が急逝すると、母は家を畳んで東京で役所勤めをしている長兄のもとに身を寄せることになる。江馬は中学校卒業まで親戚に預けられ、卒業後は小学校の先生にでもなって自活せよ、ということになった。すると、江馬は卒業まであと一学期間という段階でふらりと家を飛び出し、放浪の旅に出てしまう。着の身着のまま金銭も持たずに故郷を離れたのであるから、あまりにも無茶な話である。行く先々において、見知らぬ親切な大人たちから食料を提供してもらったり、寝床を貸してもらったり、金銭をめぐんでもらったりして何とか苦境をしのいでいたのであった。この行く当てもない放浪の途次、東京の新橋駅を下車したところ、たまたま「博文館」という出版社の看板が目に入る。そこには、自然主義文学運動の旗手・田山花袋が編集長として在籍していることを江馬は知っていたので、思い切って田山に面会を求めべく受付でその旨を告げたのであった。浮浪者のような少年がいきなりこのようなことを申し出たところで、普通は門前払いを受けるものであるが、旧制中学の帽子を被っていたことが幸いしたようである。当時の中学進学率は該当年齢人口のわずか4.3%。大変なエリートなのである。学帽を被っているだけで学力や身元保証になったであろう。田山に面会がかなうと、江馬は何とかして文学者になりたいこと、自分を弟子として創作活動の指導を願いたいこと、よるべもなく職もないので何でもよいから働かせていただけないか、と懇願したのであった。驚いたことに田山はこの申し出を受けて自分の家の書生として勉強させてもよいと考えたようだ。それで、江馬の本気度を確認め、かつは夫人の同意を得るためにその晩、自宅に招待して種々懇談をしたのであった。幸い夫人も江馬の境遇に同情と好感を示したので、田山は完成間近の新居の玄関番として江馬を受け入れることになる。しかしここでの生活もわずか3か月しか勤まらず、江馬は無断で田山家を飛び出してしまふ。自殺を試みるも死にきれず、とうとう僧侶になることを決心し、たまたま立ち寄り寄った蕎麦屋の老翁の紹介で山寺に住み込むことになる。ところが1か月ほど修行しているうちに体を壊し、長兄の家に引き取られることになったのであった。

その後も作家として身を立てるまでに種々の遍歴をたどるのであるが、この辺でやめておこう。晩年彼の全生活を支えていた天児直美によれば、「子供のころから社会生活に適應できない一種の異常性格者」だったようである。今回は江馬が考古学に関わったころの状況を紹介するが、親の愛に飢えていたこと、人の好意や情けにすぐることが巧みであったこと、受けた好意に報いることが少なかつたことは記憶にとどめておこう。(この稿続く)

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第4回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト (第170回)	小嶋 篤 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえます (第1回)	井川史子 …2	■考古学者の書棚 「ことばと思考」	垣内拓郎 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえます (第1回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

1. 考古学との出会い

1960年の年末に大雪の中をボストンからナイアガラを経てカナダに入国して以来、総合人類学の一部としての先史考古学の研究と教授に携わってきた。このような経歴をたどることになった発端は津田塾大学卒業をひかえた1953年の春、東京都立大学の社会学研究室から津田塾の学生課に来ていた求人募集に応じ、英語の試験を経て、助手補として採用していただいたことだといっただろう。戦後間もない当時、戦前にウイーンで民族学を学ばれた主任教授の岡正雄先生をはじめとして、教授の方々は長い間連絡の途絶えていた外国の機関や学者との交流を復活するについての文通のお手伝いのできるような助手補を求めているようだ。そのころの日本にはリチャード・ピアズレー、ハーバード・パツィン、ジョージ・ベネットなど、のちに日本研究者として有名になった文化人類学者、社会学者が多数来ており、これら外来研究者も日本側の先生方も情報の交換に関心がおありだったので、そのような会談の際の通訳も必要だった。岡正雄先生のお供をしてその様な会合に参加させていただいた記憶があるが、英文学科を出たばかりで通訳としてのトレーニングなどうけていなかったのだから、あまりお役にたなかつただろうと思う。

その一方、通信や翻訳のお手伝いをする内容について、民族学・社会学・文化人類学など今まで知らなかった分野の知識を広めるために本をよみはじめたが、それは私にとって新しい世界が開けることになった。1945年に戦争が終わったとき、それまで皇国日本とか、大東亜共栄圏とかといったイデオロギーをたたきこまれていたのが、がらりとかわって、民主主義の時代となり、自由主義とはわがままの身勝手ではなくて個人の人格の尊重なのだと教えられた。14・5歳のときにこのような価値観の大転換を経験したので、文化・価値体系の相対性を強調する文化人類学が魅力的におもわれたのかもしれない。しかもその頃、評判になっていたルース・ベネディクトの「菊と刀」を読んで、日本へ来たこともない人が、日本文化をこのように浮き彫りにした文化人類学的手法に感銘した。それでこの分野を本格的に勉強することにし、助手補は一年で辞職して、同じく社会学研究室に新設された大学院の社会人類学専攻課程に入学した。

社会人類学科の学習過程としては、当時の新刊書として評判だったピーター・マードックのSocial Structureを東大の東洋文化研究所から出向してくださった泉靖一先生のご指導で購読するゼミナールや、台北大学から引き揚げてこられた馬淵東一先生による台湾先住民の親族構造に関する講義などは当然だが、これらに加えて当時新発見の縄文草創期に関する講義を八幡一郎先生から伺った記憶がある。このような学習課目の配列は主任教授の岡正雄先生が人類学の諸分野との連結促進をめざして意識的に設定されたように思われる。というのは、岡正雄、石田英一郎、江上波夫、八幡一郎諸先生との対談・討論にもとずいた『日本民族の起源』(1958)の「あとがきにかえて」の項で岡正雄先生が次のように述べていられるからだ。「日本における日本民族の源流の

研究が、...隣接科学との連結を欠き、何ともみすばらしいのに比較して、...当時のウイーンの人類諸科学の際立った一つの特徴は、人類科学諸分野が相互に密接な関連をもって研究を進めていたことであろう。このような総合人類学的な雰囲気の中かで、先史考古学への志向がめばえ、特に中米の古代文明の起源について勉強したいと考え始めた。泉靖一先生もこの後まもなくインカ文明の調査に出られているから、そのあたりからも刺激があったのかもしれない。

この分野での研究の進んでいるアメリカに留学する希望がかなって、1955年9月にフルブライト奨学生としてハーヴァード大学についた。当時のハーヴァードは男性だけの大学だったから、正確にはラドクリフ大学に登録した。ひと昔前はハーヴァードの教授がケンブリッジ公園の向こう側にあるラドクリフの校舎まで講義しにこられたそうだが、私の行った頃は男女共学になる移行過程だったので、私共女子学生は学期はじめにラドクリフ大学の本部に出頭して登録、授業はハーヴァードのキャンパスで男子学生と同じ教室でうけたあと、学期末試験の際はまたラドクリフ校舎にもどる。ただし試験問題はハーヴァードの学生とまったく同じ。その答案をまとめて、ハーヴァードの先生におくり、採点していただいたのを、ラドクリフの本部で整理してわれわれ女子学生に通知するという煩雑な仕組みだった。

各学期4科目登録するのが規定なので、ゴードン・ウィリー先生の「新世界考古学入門」、ハラム・モヴィウス先生の「旧世界考古学入門」に加えて、社会人類学のコースを2科目。フルブライト留学生は聴講生ではなく正規の学生扱いだから、テストやらレポートやらでとても忙しく勉強させられた。初学年がどうやらおわった1956年の夏はメキシコ北部のドラゴンゴ州で6月中旬から8月始めまで開催されるフィールド・スクールに参加して、中米考古学発掘の初歩を学ぶことにした。この発掘の主催者は南イリノイ大学博物館だが、アメリカ各地から20名ばかりの学生が参加していた。実習の本拠はドラゴンゴ市郊外の砂丘にあるシュローダーという遺跡で、中米古代文明の最盛期のAD500からAD900ころ北進してきた高文化の最北端に位置するチャルチュイテス文化に属している。付近にはアルタ・ヴィスタやラ・ケマダなど同じくチャルチュイテス文化に属する遺跡がいくつか知られており、ピラミッドや石柱、広場などが残っている。シュローダーでの発掘の合間にはこのような遺跡の見学につれていっていただいた。

当時私も短期留学生が日本を出るとき発給されたヴィザはアメリカに一回しか入国できないものだったので、実習のあとハーヴァードに戻るためには新しいヴィザが必要だった。そのために数日のお暇をいただいて、バスでメキシコシティのアメリカ総領事館に出頭し、再入国するためのヴィザを申請したわけだが、ヴィザのできるのを待っている2-3日のあいだに、テオティワカン遺跡などメキシコシティ付近の著名遺跡を見学し、テオティワカンの有名なピラミッドに登ってみたりすることができたのは幸いだった。



▲LaQuemada (1956夏)

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト ①70

国指定特別史跡・大宰府跡 ～福岡県太宰府市～

小嶋 篤

私にとってのマイ・フェイバレット・サイトは、九州歴史資料館への着任直後に担当した国指定特別史跡・大宰府跡である。私が就職した平成21(2009)年は、東九州自動車道建設に伴う発掘調査や複数のダム建設に伴う発掘調査が佳境を迎えつつある時分であり、新人の発掘調査技師として、これらの発掘調査に係わりそうだと予測していた。予測に反しての九州歴史資料館への配属、しかも特別史跡の調査担当ということで面喰った覚えがある。

今日振り返ると、平成21年は大宰府の調査研究における画期の年であったが、新人職員の私は与えられた業務に手一杯で、そのような俯瞰的な認識には至らずに日々を過ごしていた。この平成21年より、今日も続く『大宰府政庁周辺官衙跡』の本報告書刊行が開始されたのである。また、大宰府史跡の発掘調査も「蔵司地区官衙跡」という重要地区の調査研究に本格的に着手した年でもあった。この蔵司地区官衙跡との出会いは、公務員・発掘技師・研究者という、あらゆる面で今日の私に影響を与えている。

調査研究の詳細については、平成24(2012)年刊行の『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ』(九州歴史資料館)で報告されているが、その計画は上司である小田和利氏・岡寺良氏・一瀬智氏らを中心に体系的かつ綿密に立案されていた。その調査研究計画の概要は、まず「調査過程を地表面観察や文献史料・先行研究等の集積を軸とする①現況把握調査」、次に「旧地形と遺構面の残存状況を把握する②確認調査」、そして「①・②の成果をふまえて蔵司地区の構造解明を目的に実施する③重点調査」に至るといふ三工程に集約される。私はその実働部隊の一人として、①現況把握調査と②確認調査を担うことになったが、今にして思うと、調査研究の立案から実施、報告にいたる一連の過程を体感し、指導頂いた貴重な機会であった。

この「①現況把握調査」の過程で、思いもよらない資料と出会うことになった。調査の一環として、蔵司地区官衙の大形礎石建物(SB5000)の実測をしていたところ、足下に鉄滓の小片が転がっていることに気がついた。実測作業を中断して周囲に散らばる鉄滓を観察したところ、いずれも重量感があり、いわゆる「質の悪い鉄塊」ばかりであった。どのような操業をしたら、このような生産性の悪い鉄滓が排出されるのかという疑念が生じた。その数日後の礎石実測作業過程で、さらに驚く資料を見出した。それは、原形を保つ鉄製小札の破片であった。前日の雨で



▲蔵司地区礎石建物SB5000

濡れた地面の上で、黒光りする小札片。あたりを見渡せば、いたるところで光沢を放つ鉄片や鉄塊が顔をのぞかせている。その光景は、生涯忘れることはないだろう。常識では考えられない状況の中で、中山平次郎先生の論文「太宰府蔵司の遺物」(『考古学雑誌』第5号4巻、1914年)が頭をよぎった。こ



▲蔵司地区採集の小札片

この論文は「蔵司」で採取した武器・武具片を基点に大宰府の兵器生産に論を進めた名著であるが、先生の没後、武器・武具片が採取された正確な場所は公的には永く不明となっていたからである。約100年の時を経て、大宰府蔵司の武器・武具片が、大宰府研究ひいては古代史研究に再登場した瞬間であった。

私は大宰府の調査研究、蔵司地区の構造解明には、地中に埋蔵される大量の武器・武具片の追究が必要不可欠であることを自覚し、古代の兵制や武器・武具の研究に取り組むことを決意した。まず手はじめに年代決定の基準資料になり得る大宰府政庁跡出土小札の研究に着手した。着手したはいいが、小札にのこる情報量の多さに圧倒された。大宰府政庁跡の小札は藤原純友による焼き討ち(941年)後の整地層にパックされていたことで、小札の遺存状態がすこぶるよく、小札同士を繋ぐ紐に加えて、表面に布や藁等の有機質、漆片が遺存しており、その構造解明は一筋縄ではいかないものであった。検討結果の一部はすでに「大宰府政庁跡出土小札の研究」(『九州歴史資料館研究論集』35、2010年)等で適宜報告しているが、その全体像の研究は今日でも続けている。

現在までに私が取り組んできた研究の成果は、科学研究費助成事業の研究成果報告書『大宰府の軍備に関する考古学的研究』(研究代表者：小嶋篤、九州国立博物館、2016年)にまとめている。ずいぶん大風呂敷なタイトルをつけてしまったが、大宰府跡に埋蔵される武器・武具片がもつ資料的価値は、古代史研究の進展に大きく寄与できるものである。個人的には、資料の遺存状態とその数量は、奈良・東大寺正倉院御物に比肩する内容であることを確信している。

平成30(2018)年は大宰府史跡発掘50年の記念の年である。一年間を通じて、地元の大宰府市・古都大宰府保存協会を中心に、福岡県、九州歴史資料館等の関係団体による各種の展示・イベントが企画されている。現在、私が職務に励んでいる九州国立博物館でも、平成30年9月12日(水)～12月23日(日)に特集展示『大宰府研究の歩み』を開催する。私のマイ・フェイバレット・サイトから出土した資料も展示予定なので、是非、秋の大宰府を訪ねて欲しい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは阿南翔悟さんです。

考古学者の書棚

「ことばと思考」

今井むつみ著／岩波書店(2010)

垣内 拓郎

言語は、世界を切り分け、整理する。——本書に記載される世界の切り分け方の例をいくつか挙げてみる。例えば、色について、信号機の「すずめ」の色を日本人は「青」、アメリカ人は「緑」と呼ぶ、といったよく聞く話もあるが、パプアニューギニアのダニ族という部族では「明るい色」と「暗い色」の二つの色しかないという。モノの名前、例えば容器について中国語で「瓶(ピン)」と分類されるものには、英語では「jar」に加え、「bottle」「container」と呼ぶものの一部が含まれるというように、同じ容器でも言語によって名前のカテゴリーが違っている例もある。また、モノとモノの位置関係を示す場合、日本語や英語などでは「前・後・左・右」という相対的な座標で関係を示す語を使う場合があるが、オーストラリアのアボリジニの言語のひとつ、グーグ・イミディル語では全て「東・西・南・北」の絶対的な座標で位置関係を表すという。このような多様な言語が世界に存在するのを知っただけでも面白い。

本書は、文化人類学や言語学で収集されてきた、言語の世界の切り取り方の多様性を踏まえ、言語は思考・認識に影響を与える、という言語学者ベンジャミン・リー・ウォーフの仮説について、「科学的」な実験データに基づき、発達心理学、認知心理学、脳科学の観点も織り交ぜながら検証を試み、人にとっての言語の存在について考察している。

著者は、このウォーフ仮説に対して大きく3つの問いを立てて、概ね正しいと結論づける。

一つめは、異なる言語の話者は思考や認識も異なるのか、という問いである。結論としては、言語によって思考や認識に多少の差があり、全く同じとはいえないとする。色や音等の境界のない、物理的に連続する知覚情報やモノの認識については、実態的には知覚できているにも関わらず、心理学的に「カテゴリー知覚」と呼ぶように、二つのカテゴリーの境界にある知覚情報を中間の曖昧な情報として認識するのではなく、認識をどちらかの言語のカテゴリーに寄せたり、その境界を歪めたりするという。また、空間関係や時間については、「前後左右」を用いる言語話者と「東西南北」のみを用いる話者を比べたとき、後者の方が方向感覚に優れていたり、方位が位置関係の判断や認識に優位に影響したりというように、言語によっては認識の仕方が大きく異なるという。その一方で、誰にでも知覚可能な明確な区切りが存在する場合は、様々な言語の間でも共通の基準や境界で分けられたカテゴリーを持つというような、ある程度の普遍的傾向も強くなるという。

二つめは、子どもが言語を学習することによってその認識や思考がどのように変容するのか、という問いである。子どもが言語を学習することは単なるコミュニケーション手段を得るだけでなく、それまでと違った認識を得る手段を得、思考の手段を得るという、人間の知性にとっての「認知革命」と位置づけている。赤ちゃんはどの言語環境にいても、最初は様々な要素にそれぞれ細かく注意を払い、僅かな違いでも見分けられることができるが、自分の言語を学んでいくうちに母語で区別しない要素に対して

生後十九ヶ月くらいまでに注意を向けることをやめてしまうという。そして、赤ちゃんの時に母語にさらされていくなかで、その「カテゴリー知覚」が形成される。さらに、言葉を学習することで、子どもが直接教わったり経験していなかったりしないものでも、帰納推論によって概念を学習し、大人が持つ概念構造を自ら素早く作り上げ、モノや関係の類似性や同一性、共通性、規則性などに基づいて世界を分類することができ、抽象的な思考や概念の発展が可能になる。また、人間の知覚能力、カテゴリー形成能力、推論能力など基本的な認知能力のそれぞれを、用途に応じて組み合わせたり、複数の情報を統合・処理したりすることができ、イメージ等を共有、伝達、学習し、多様な視点から柔軟に思考・認識することで、知識を発展させていくことができる。

三つめは、言語は大人のモノの知覚の仕方、記憶、推論や意志決定に影響を与えるか、という問いである。人の脳は、自然な状況下で言語を明示的に使う必要が無くても、モノを見たり聞いたり記憶したりする時に無意識下でその言葉が想起されてしまい、言語が人の思考・認識に無意識に入り込み、世界に対する見方や知覚の仕方を変えたり、記憶を歪めたり、判断や意志決定に影響を与えるという。無意識的な言語の使用によってカテゴリー知覚の現象が生まれるが、興味深いことに、言語が使えない状態ではカテゴリー知覚は消えるという実験結果も示されている。

結論のみをまとめたが、言語が思考・認識に与える影響やその程度について、具体的な事例や実験データ等、結論への詳細は、非常に示唆に富む。是非本書で確認していただきたい。

「私たちは言語のフィルターを通して、少々歪められた世界を見ている」と著者は述べる。発展させて考えれば、世界の新しい切り分け方や柔軟な思考・認識を得ることで、フィルターの形や質、構造を変えてゆき、またさらに世界を新たに切り分けられるともいえる。

私が現職に就く前年、本屋で平積みされていた本書を見つけ読み始めた。本書は明らかに考古学の本ではないが、著者の一つめの問いから、考古学の基本ともいえる分類という行為には、実態的な知覚情報とは別に、「カテゴリー知覚」が意識的、無意識的を問わず多分に生まれているかもしれないと、ただ単純に思った。採用が決まり挨拶のために大学の研究室に久しぶりに訪れた際、私の考古学の恩師も偶然同時期に本書を読んでおられた。恩師は二つめの問いに関心を持っておられたと記憶している。他者からすれば些細なことだが、同じ本の異なる箇所への関心を認識したことで、「言語」を介し、「考古学」というフィルターについてもうひとつの新しい見方を教わったようで個人的には印象深い本である。

アルカ通信 No.177

発行日 2018年6月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp